

社会化における絶対的自由への道

高 澤 勇

目 次

要約

- 1 序論
- 2 社会的存在における相対的不自由と相対的自由について
 - 2・1 相対的不自由の現実について
 - 2・2 相対的不自由の是正について
 - 2・3 相対的不自由がもたらすもの
- 3 個人的存在における相対的不自由と相対的自由について
 - 3・1 人間的欲求と相対的不自由について
 - 3・2 人間的欲求充足と相対的自由について
- 4 絶対的自由への道
 - 4・1 自我における絶対的不自由について
 - 4・2 絶対的自由の可能性について
 - 4・3 絶対的自由の心境がもたらすもの
- 5 結論

要 約

本稿の目標は、社会化における絶対的自由への道を解明することであった。

この目標に向かって、まず第2章においては、「社会的存在における相対的不自由と相対的自由について」を研究した。その第2章第1節においては、「相対的不自由の現実について」を研究した。ここでは、現実社会における相対的不自由の実態について明確にした。¹⁾

次に、第2章第2節においては、「相対的不自由の是正について」を研究した。ここでは、ひとは、自分が各種の相対的不自由の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正（相対的自由）を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不自由の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正（相対的自由）を求めないであろう。以上のことを明確にした。

その次に、第2章第3節においては、「相対的不自由がもたらすもの」について研究した。ここでは、相対的不自由がもたらす歴史的・社会的問題について明確にした。

次に、第3章においては、「個人的存在における相対的不自由と相対的自由について」を研究した。その第3章第1節においては「人間的欲求と相対的不自由について」を研究した。ここでは、人間的欲求と相対的不自由の関係について明確にした。

次に、第3章第2節においては「人間的欲求充足と相対的自由について」を研究した。ここでは、人間的欲求充足と相対的自由の関係について明確にした。

その次に、第4章においては、「絶対的自由への道」について研究した。その第4章第1節においては、「自我における絶対的不自由について」を研究した。ここでは、自我はその根底から絶対的不自由であることを明確にした。

次に、第4章第2節においては、「絶対的自由の可能性について」を研究した。ここでは、人間の無的主体（無的存在）においてのみ絶対的自由が可能であることを明確にした。また、ここでは人間的視点からみた個人の絶対的自由と生物的視点からみた個人の絶対的自由および物質的視点からみた個人の絶対的自由について研究した。これらの、本稿の最重要部分にあたる研究の結論は

以下のように要約することができる。

社会化における人間的視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の絶対的自由は、人間の本来の姿は不生の単種単一の素粒子（または「真空のエネルギー」あるいは「ニュートリノ」等（物理学的見解）²⁾「分割不能の物質」（数学的見解）³⁾「無的主体・存在」（仏教的見解）⁴⁾であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子（分割不能の無的主体・存在）であり、それは宇宙のすべての生物の本来の姿と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本来の姿と同様である、ということを知れば、すべての人間や生物および物質は不生の単種単一の素粒子（分割不能の無的主体・存在）である点において絶対的に平等であり、それゆえ絶対的に自由であることが理解できるからである。

最後に、第4章第3節においては、「絶対的自由の心境がもたらすもの」について研究した。ここでは、先の第3章第1節の「相対的不自由がもたらすもの」として生じてきた歴史的・社会的問題が、絶対的自由の心境を修得することによって、すべて解消されることを明確にした。

キーワード：社会化、最終目標、分割不能の無的存在、真空のエネルギー、素粒子、絶対的自由、絶対的不自由、相対的自由、相対的不自由

1 序 論

本稿は、わたくしが約20年前から研究を続けている「社会化の最終目標は何か」という大きな主題の一部分を構成するものである。

この研究主題に向かって、先に、わたくしは、拙論「社会化の原動力—体系の概要—」を公表した。（高澤1997）そこでは、個人はなぜ社会を生み出すのかという主題の解明に主眼をおいた。⁵⁾

次に、わたくしは、拙論「社会化の発展」を公表した。(高澤1998) ここでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における最初の社会化および社会はいかにして発展するのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁶⁾

その次に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標」を公表した。(高澤2006) ここでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における社会化の最終目標は何であるのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁷⁾

この「社会化の最終目標」において到達した結論は次の通りである。

「社会化の最終目標は、真の自己(宗教的自己)を実現して、しかも人間社会で5段階の欲求を充足させて生きてゆくことである。」(高澤2006: 53)

これに続いて、わたくしは、拙論「社会化の最終目標への道」を公表した。(高澤2009)

ここでは、社会化の原動力によって生み出され、発展した、個人の社会化の最終目標への道はどのようなものであるのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁸⁾

この「社会化の最終目標への道」において到達した結論は次の通りである。

「社会化の最終目標は平安である。平安であるためには人生における諸々の苦痛から開放されなければならない。諸苦痛から開放されるためには、その諸苦痛が発生してくる根源を知らなければならない。その諸苦痛の根源は無明にある。無明とは真実相に対する無明である。では、真実相とは何であるのか。真実相すなわち宇宙(万物)の真実相とは空である。宇宙(万物)は空であるとはどういうことであるのか。宇宙(万物)は空であるとは、宇宙(万物)は不生の素粒子(分割不能の無的主体・存在)²⁾ ³⁾ ⁴⁾の単一体が縁起によって集合し、また離散することを繰り返して絶えることのない姿であるということである。ひとは、この宇宙(万物)の真実相を知ることによって「苦痛」から開放されて社会化の最終目標である「平安」に到達することができるのである。」(高澤2009)

ところで、私たちは幼い頃から、意識的に、あるいは無意識的にさえも、社

会生活において絶対的自由を求め、また絶対的平等を求めて生きているといっ
てよいであろう。

しかし、絶対的自由とは何であるのか、ということを実際に忍耐強く学び考
え抜き、その結論に到達し得た人は少ないであろう。多くのひとは、現実の不
自由・不平等に悩みながらも、日々を生きていくために、日常的な問題を常に
優先することによって、絶対的自由とは何であるのか、というような人生にお
いて非常に重要な問題であるにしても、解決するには非常に難解で、深い学識
と強靱な思考力を必要とするであろう問題については、保留にして、それを学
び考えることを中止しているのではないだろうか。また、絶対的平等とは何で
あるのか、ということについても上記と同様のことが言えるであろう。

さて、平安とは絶対的自由にして絶対的平等の境地のことである。したがっ
て、平安に到達するためには絶対的自由にして絶対的平等の境地に到達しなけ
ればならない。では、どのようにすれば、絶対的自由にして絶対的平等の境地
に到達することができるのであろうか。それを知るためには、まず第1に、社
会化における絶対的自由とは何であるのか、また、社会化における絶対的平等
とは何であるのか、ということについて知らなければならない。第2に、社会
化における絶対的自由に到達するためにはどの道を歩いて行かなければなら
ないのか、また、社会化における絶対的平等に到達するためにはどの道を歩いて
行かなければならないのか、ということについて知らなければならない。そし
て第3に、絶対的自由と絶対的平等とは対立しないで両立するものであろうか、
この対立するように思える両者が両立することが可能な地点はどこであるの
か、ということについても知らなければならないと思う。

しかし、これらのことを同時に研究し、解明し、叙述することはできない。
また、これらの難解な研究においては、理解しやすいものから始めるのが得策
であろうと思う。

さて、絶対的自由と絶対的平等の両者を解明・理解するにおいては、絶対的
自由よりも先に絶対的平等について解明するほうが理解しやすいであろうと思

う。

それで、わたくしは、上記の「社会化の最終目標への道」に続いて、「社会化における絶対的平等への道」を公表した。(高澤2010) そこでは、社会化における絶対的平等は如何にして可能であるのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁹⁾

この「社会における絶対的平等への道」において到達した結論は次の通りである。

「人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての人間・生物・物質の本来の姿と同様であるということを知れば、宇宙のすべての人間・生物・物質は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であるという点において絶対的に平等である。」(高澤2009: 18)

この結論にしたがって、次には、絶対的自由への道を解明しなければならない。

2 社会的存在における相対的不自由と相対的自由について

本稿の目標は、社会化における絶対的自由への道を解明することである。この目標に向かって、この第2章においては、「社会的存在における相対的不自由と相対的自由について」を研究する。まず第1節では、「相対的不自由の現実について」を研究する。第2節では、「相対的不自由の是正について」を研究する。そして、第3節では、「相対的不自由がもたらすもの」について研究する。

2・1 相対的不自由の現実について

相対的不自由の現実はどのようなものであるのか。この命題を解明すること

が本節の目標である。

ところで、ここで用いる具体例としては、拙論「社会化における絶対的平等への道」の第2章で用いたものをできるだけ使用することで、「相対的不平等の現実」との比較を可能にしたいと思う。

さて、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

美女と醜女がいる。美女は無数の段階にランク付けされる。醜女もまた無数の段階にランク付けされる。美女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、醜女よりも自由である。美女は醜女よりも相手の選択肢が多い。これに対して、醜女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、美女よりも不自由である。醜女は美女よりも相手の選択肢が少ない。他の要素が加わるので正確には言えないけれども、一般的に言えば、上位の美女であるほど、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、相手（男）の選択肢が多い。最上位の美女は、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、相手（男）の選択肢が最も多い。反対に、下位の醜女であるほど、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、相手（男）の選択肢が少ない。最下位の醜女は、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、相手（男）の選択肢が最も少ない。こうした視点からみれば、最下位の醜女は、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、相手（男）の選択肢が最も少ないという理由で、この点においては、最も不自由である。反対に、最上位の美女は、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、相手（男）の選択肢が最も多いという理由で、この点においては、最も自由である。こうした視点からみれば、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に、最上位の美女より下位の女子は、その美女率が低いほど、それに比例して自由の程度が低下する。別言すれば、最上位の美女より下位の女子は、その醜女率が高いほど、それに比例して不自由である。そして、最上位の美女は、常にその最高の美女率を維持できるわけではない。最上位の美女も高齢化やその他の要因によって、最高の美女率の座を別の美女に明け渡さなければならないという危険性がある。このように考えるならば、前述のこ

とく、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

また、記憶力の良い人と悪い人がいる。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。記憶力の良い人は就職先を選択する場合に、記憶力の悪い人よりも自由である。記憶力の良い人は記憶力の悪い人よりも就職先相手の選択肢が多い。これに対して、記憶力の悪い人は記憶力の良い人よりも不自由である。記憶力の悪い人は記憶力の良い人よりも就職先相手の選択肢が少ない。他の要素が加わるので正確には言えないけれども、一般的に言えば、上位の記憶力所有者であるほど、就職先相手を選択する場合に、相手の選択肢が多い。最上位の記憶力所有者は、就職先相手を選択する場合に、相手の選択肢が最も多い。反対に、下位の記憶力所有者であるほど、就職先相手を選択する場合に、相手の選択肢が少ない。最下位の記憶力所有者は、就職先相手を選択する場合に、相手の選択肢が最も少ない。こうした視点からみれば、最下位の記憶力所有者は、就職先相手を選択する場合に、相手の選択肢が最も少ないという理由で、この点においては、最も不自由である。反対に、最上位の記憶力所有者は、就職先相手を選択する場合に、相手の選択肢が最も多いという理由で、この点においては、最も自由である。こうした視点からみれば、就職先相手を選択する場合に、最上位の記憶力所有者より下位の記憶力所有者は、その記憶力率が低いほど、それに比例して自由の程度が低下する。別言すれば、最上位の記憶力所有者より下位の記憶力所有者は、その忘却力率が高いほど、それに比例して不自由である。そして、最上位の記憶力所有者は、常にその最高の記憶力率を維持できるわけではない。最上位の記憶力所有者も高齢化や病気やその他の要因によって、最高の記憶力率の座を別の優秀な記憶力所有者に明け渡さなければならないという危険性がある。このように考えるならば、前述のごとく、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由

由である。

富裕者と貧困者がいる。富裕者は無数の段階にランク付けされる。貧困者もまた無数の段階にランク付けされる。富裕者は高級品を選択・購入する場合に、貧困者よりも自由である。富裕者は貧困者よりも高級品の選択肢が多い。これに対して、貧困者は高級品を選択・購入する場合に、富裕者よりも不自由である。貧困者は富裕者よりも高級品の選択肢が少ない。他の要素が加わるので正確には言えないけれども、一般的に言えば、上位の富裕者であるほど、高級品を選択・購入する場合に、高級品の選択肢が多い。最上位の富裕者は、高級品を選択・購入する場合に、高級品の選択肢が最も多い。反対に、下位の貧困者であるほど、高級品を選択・購入する場合に、高級品の選択肢が少ない。最下位の貧困者は、高級品を選択・購入する場合に、高級品の選択肢が最も少ない。こうした視点からみれば、最下位の貧困者は、高級品を選択・購入する場合に、高級品の選択肢が最も少ないという理由で、この点においては、最も不自由である。反対に、最上位の富裕者は、高級品を選択・購入する場合に、高級品の選択肢が最も多いという理由で、この点においては、最も自由である。こうした視点からみれば、高級品を選択する場合に、最上位の富裕者より下位の富裕者は、その富裕率が低いほど、それに比例して自由の程度が低下する。別言すれば、最上位の富裕者より下位の富裕者は、その貧困率が高いほど、それに比例して不自由である。そして、最上位の富裕者は、常にその最高の富裕率を維持できるわけではない。最上位の富裕者も高齢化や浪費やその他の要因によって、最高の富裕率の座を別の富裕者に明け渡さなければならないという危険性がある。このように考えるならば、前述のごとく、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

2・2 相対的不自由の是正について

では、ひとは相対的不自由の是正（別言すれば、相対的自由）を求めているのであろうか。この命題を説明することが本節の目標である。

ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由およびその他のすべての相対的不自由の下位にいる場合には、自分より上位にいる人に対して相対的不自由の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由の上位にいる場合には、自分より下位にいる人に対して相対的不自由の是正を求めないであろう。これを極端に言えば、ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由およびその他のすべての相対的不自由の最下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由およびその他のすべての相対的不自由の最上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正を求めないであろう。

したがって、「ひとは相対的不自由の是正を求めているのであろうか。」という冒頭の命題の説明は次のようになるであろう。

ひとは、自分がすべての相対的不自由の中の一種類だけの相対的不自由であっても、その下位にいる場合には、自分より上位にいる、その一種類の相対的不自由を現象させているすべての人に対して相対的不自由の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分がすべての相対的不自由の中の一種類だけの相対的不自由であっても、その上位にいる場合には、自分より下位にいる、その一種類の相対的不自由を現象させているすべての人に対して相対的不自由の是正を求めないであろう。

もう少し詳細に、しかし、結論的に要約すれば、次のようになるであろう。

(1) ひと（自我）は、一面においては、徹頭徹尾、相対的不自由の是正を求めている。

1) ひとは、ある相対的不自由の下位にいるときは、自分より上位に

いるひとに対して相対的不自由の是正を求めている。

- 2) すべての相対的不自由の最上位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に言えば、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由の是正を求めていることになるのである。

(2) ひと（自我）は、他面においては、徹頭徹尾、相対的不自由を求めている。

- 1) ひととは、ある相対的不自由の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不自由の是正を求めていない。別言すれば、ひととは、ある相対的不自由の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不自由を求めているともいえる。

- 2) すべての相対的不自由の最下位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に言えば、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由の是正を求めていないことになる。別言すれば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由を求めているともいえるのである。

2・3 相対的不自由がもたらすもの

相対的不自由がもたらすものは何であるか。この命題を解明することが本節の目標である。

前節において解明した結論にしたがって、

- ① 相対的不自由の上位者は相対的不自由の是正を求めない。
- ② 相対的不自由の下位者は相対的不自由の是正を求める。

このように仮定するならば、

- ① 相対的不自由の上位者は相対的不自由の現実社会の是正を求めない。
- ② 相対的不自由の下位者は相対的不自由の現実社会の是正を求める。

ということになる。

ところで、既に触れたように、「すべての相対的不自由の最上位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に言えば、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由の是正を求めていることになるのである。」ということになる。したがって、相対的不自由の最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由の現実社会の是正を求めていることになるのである。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満の数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億人の人間の相対的不自由の現実社会に対する不平不満を述べれば無数となるであろう。しかし、こうした相対的不自由を是正しようとする力と同程度の抑止力が作用することによって、相対的不自由をもたらす歴史的・社会的問題は容易には解決することができないであろう。

既に「第2章 相対的不自由の現実について」で述べた相対的不自由の種類との関係で述べるならば、次の問題を挙げることができる。

① 美女の相対的自由に対する醜女の相対的不自由の問題

美女と醜女がいる。美女も無数にランク付けられる。醜女もまた無数にランク付けられる。そして、美女度の上位に位置する人は、美女度の下位に位置する人に対して差別・蔑視することによって劣等感（相対的不自由）を与え、そ

れによって自分の優越感（相対的自由）を高めようとする。それゆえ、醜女意識のある人は、少しでも美女度を上げ、自分の劣等感から逃れ、逆に自分の優越感を高めるために一生懸命に努力しているのである。

② 記憶力の良い人（利口者）の相対的自由と記憶力の悪い人（馬鹿者）の相対的不自由の問題

記憶力の良い人と悪い人がいる。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、記憶力の良い人は、記憶力の悪い人に対して差別・蔑視することによって劣等感（相対的不自由）を与え、それによって自分の優越感（相対的自由）を高めようとする。それゆえ、記憶力の悪い人は、少しでも多くの知識を記憶することによって、自分の劣等感から逃れ、逆に自分の優越感を高めるために一生懸命に努力しているのである。

③ 富裕者の相対的自由と貧困者の相対的不自由の問題

富裕者と貧困者がいる。富裕者の中でも、その程度において無数にランク付けられる。貧困者の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、富裕者は、貧困者に対して差別・蔑視することによって劣等感（相対的不自由）を与え、それによって自分の優越感（相対的自由）を高めようとする。それゆえ、貧困者は少しでも多く富裕になることによって、自分の劣等感から逃れ、逆に自分の優越感を高めるために一生懸命に努力しているのである。

上記の、相対的不自由がもたらす結果の他にも非常に多くの歴史的・社会的問題がある。

しかし、現存する数十億の人間の相対的不自由が存在する現実社会に対する無数の不平不満の膨大なエネルギーの爆発を抑制している力が他方にある。

既に触れたように、「すべての相対的不自由の最下位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に言えば、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその

程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由の是正を求めていることになるのである。」ということになる。すると、相対的不自由の最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、またその程度においては無数の有様によって、何らかの相対的不自由の現実社会の是正を求めていることになるのである。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満を抑止する数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億の人間の相対的不自由の現実社会に対する不平不満を抑止する意見を述べれば無数となるであろう。

3 個人的存在における相対的不自由と相対的自由について

この第3章においては、「個人的存在における相対的不自由と相対的自由について」を研究する。まず第1節では、二十世紀におけるアメリカ合衆国の著名な心理学者であるA. H. マズローの有名な五段階欲求説に基いて、「人間的欲求と相対的不自由について」を研究する。(Maslow1970) 第2節では、「人間的欲求充足と相対的自由について」を研究する。

3・1 人間的欲求と相対的不自由について

人間的欲求と相対的不自由はどのように関係しているのか。この命題を解明することが本節の目標である。

3・1・1 生理的欲求と相対的不自由について

マズローの主張したように、人間には第1段階の基本的欲求として生理的欲求がある。¹⁰⁾ ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。言うまでもないことであるが、生理的欲求の中の食欲を例として具体的に述べ

ると次のようになる。

人間には、生まれながらに生理的欲求の一つとして食欲がある。ひとは誰でもこの欲求が充足されなければ生命を維持することができない。この欲求は、それが充足されるまで欲求の程度を増加させながら、続いていく。この間、人間は相対的不自由の状態にあり、時間の経過に従って、その程度を増加させていく。すなわち、食物を求めても取得できない状態にある。

3・1・2 安全欲求と相対的不自由について

マズローの主張したように、人間には第2段階の基本的欲求として安全欲求がある。¹¹⁾ この欲求は第1段階の生理的欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。言うまでもないことであるが、安全欲求の中の生命の安全欲求を例として具体的に述べると次のようになる。

人間には、生まれながらに安全欲求の一つとして生命の安全欲求がある。ひとは誰でもこの欲求が充足されなければ、生命を維持することができないというほどではないにしても、不安である。この欲求は、それが充足されるまで欲求の程度を増加させながら、続いていく。この間、人間は相対的不自由の状態にあり、時間の経過に従って、その程度を増加させていく。すなわち、安全を求めても取得できない状態にある。

3・1・3 社会的欲求と相対的不自由について

マズローの主張したように、人間には第3段階の欲求として社会的欲求がある。¹²⁾ この欲求は第2段階の安全欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。言うまでもないことであるが、社会的欲求の中のコミュニケーション（他者と

の相互行為) 欲求を例として具体的に述べると次のようになる。

人間には、生まれながらに社会的欲求の一つとしてコミュニケーション欲求がある。ひとは誰でもこの欲求が充足されなければ、人間社会の中で生きていくことができないというほどではないにしても、孤独である。この欲求は、それが充足されるまで欲求の程度を増加させながら、続いていく。この間、人間は相対的不自由の状態にあり、時間の経過に従って、その程度を増加させていく。すなわち、他者とのコミュニケーションを求めても取得できない状態にある。

3・1・4 尊敬欲求と相対的不自由について

マズローの主張したように、人間には第4段階の欲求として尊敬欲求がある。¹³⁾ この欲求は第3段階の社会的欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。言うまでもないことであるが、尊敬欲求の中の友達に尊敬されたいという欲求を例として具体的に述べると次のようになる。

人間には、生まれながらに尊敬欲求の一つとして友達に尊敬されたいという欲求がある。ひとは誰でもこの欲求が充足されなければ、人間社会の中で生きていくことができないというほどではないにしても、不快である。この欲求は、それが充足されるまで続いていく。この間、人間は相対的不自由の状態にある。すなわち、友達に尊敬されたいと思っても、友達に尊敬してもらえない状態にある。

3・1・5 自己実現欲求と相対的不自由について

マズローの主張したように、人間には第5段階の欲求として自己実現欲求がある。¹⁴⁾ この欲求は第4段階の尊敬欲求がある程度まで充足されると生じて

くるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。言うまでもないことであるが、自己実現欲求の中の一流の詩人になりたいという欲求を例として具体的に述べると次のようになる。

人間には、生まれながらに自己実現欲求がある。一流の詩人になることが自己実現であると思っている人は誰でもこの欲求が充足されなければ、人間社会の中で生きていくことができないというほどではないにしても、愉快ではない。この欲求は、それが充足されるまで続いていく。この間、人間は相対的不自由の状態にある。すなわち、一流の詩人になりたいと思っても、一流の詩人になれない状態にある。

3・2 人間的欲求充足と相対的自由について

人間的欲求充足と相対的自由はどのように関係しているのか。この命題を説明することが本節の目標である。

3・2・1 生理的欲求充足と相対的自由について

既に前節第1項において述べたように、人間には第1段階の基本的欲求として生理的欲求がある。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。しかし、この欲求が充足されたときは相対的自由の状態にある。

生理的欲求の中の前節第1項で用いた食欲を例として具体的に述べると、食物を求めて取得できた状態にある。

しかし、この相対的自由の状態は一時的自由の状態であって、永遠的自由の状態ではない。また、この種類の相対的自由の状態を幾度となく繰り返しても絶対的自由の状態に到達することはない。この種類の相対的自由の状態は時間の経過と共に相対的自由の程度が低下し、反対に相対的不自由の程度が増加してゆく。

3・2・2 安全欲求充足と相対的自由について

既に前節第2項において述べたように、人間には第2段階の基本的欲求として安全欲求がある。¹¹⁾ この欲求は第1段階の生理的欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。しかし、この欲求が充足されたときは相対的自由の状態にある。

安全欲求の中の前節第2項で用いた生命の安全欲求を例として具体的に述べると、生命の安全を求めて取得できた状態にある。

しかし、この相対的自由の状態は一時的自由の状態であって、永遠的自由の状態ではない。また、この種類の相対的自由の状態を幾度となく繰り返しても絶対的自由の状態に到達することはない。この種類の相対的自由の状態は時間の経過と共に相対的自由の程度が低下し、反対に相対的不自由の程度が増加してゆく。

3・2・3 社会的欲求充足と相対的自由について

既に前節第3項において述べたように、人間には第3段階の欲求として社会的欲求がある。¹²⁾ この欲求は第2段階の安全欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。しかし、この欲求が充足されたときは相対的自由の状態にある。

社会的欲求の中の前節第3項で用いたコミュニケーション欲求を例として具体的に述べると、他者とのコミュニケーションを求めて取得できた状態にある。

しかし、この相対的自由の状態は一時的自由の状態であって、永遠的自由の状態ではない。また、この種類の相対的自由の状態を幾度となく繰り返しても絶対的自由の状態に到達することはない。この種類の相対的自由の状態は時間の経過と共に相対的自由の程度が低下し、反対に相対的不自由の程度が増加し

てゆく。

3・2・4 尊敬欲求充足と相対的自由について

既の前節第4項において述べたように、人間には第4段階の欲求として尊敬欲求がある。¹³⁾ この欲求は第3段階の社会的欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。しかし、この欲求が充足されたときは相対的自由の状態にある。

尊敬欲求の中の前節第4項で用いた友達に尊敬されたいという欲求を例として具体的に述べると、友達に尊敬されたいと思って、友達に尊敬してもらえた状態にある。

しかし、この相対的自由の状態は一時的自由の状態であって、永遠的自由の状態ではない。また、この種類の相対的自由の状態を幾度となく繰り返しても絶対的自由の状態に到達することはない。この種類の相対的自由の状態は時間の経過と共に相対的自由の程度が低下し、反対に相対的不自由の程度が増加してゆく。

3・2・5 自己実現欲求充足と相対的自由について

既の前節第5項において述べたように、人間には第5段階の欲求として自己実現欲求がある。¹⁴⁾ この欲求は第4段階の尊敬欲求がある程度まで充足されると生じてくるものである。ひとはこの欲求が充足されるまでは相対的不自由の状態にある。しかし、この欲求が充足されたときは相対的自由の状態にある。

自己実現欲求の中の前節第5項で用いた一流の詩人になりたいという欲求を例として具体的に述べると、一流の詩人になりたいと思って、一流の詩人になれた状態にある。

しかし、この相対的自由の状態は一時的自由の状態であって、永遠的自由の

状態ではない。また、この種類の相対的自由の状態を幾度となく繰り返しても絶対的自由の状態に到達することはない。この種類の相対的自由の状態は時間の経過と共に相対的自由の程度が低下し、反対に相対的不自由の程度が増加してゆく。

4 絶対的自由への道

この第4章においては、「絶対的自由への道」について研究する。まず第1節では、「自我における絶対的不自由について」を研究する。第2節では、「絶対的自由の可能性について」を研究する。そして、第3節では、「絶対的自由の心境がもたらすもの」について研究する。

4・1 自我における絶対的不自由について

自我における絶対的自由は可能であるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

個人的存在においては、一生涯において、5段階の欲求の不充足という意味での相対的不自由の状態とその欲求充足という意味での相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。

では、その道は絶対的自由に向う道であろうか。そうではないのである。

4・1・1 生理的欲求における絶対的不自由について

第1段階の生理的欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に渡って生理的欲求における相対的不自由の状態と生理的欲求充足における相対的自由の状態とを

繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

4・1・2 安全欲求における絶対的不自由について

第1段階の生理的欲求がある程度において充足されると、ひとには次の第2段階の安全欲求が生じてくる。別言すれば、第1段階の生理的欲求の充足によって生み出される相対的自由は第2段階の安全欲求という相対的不自由を生み出すのである。この欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、ひとは生命体であるから、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に渡って相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

4・1・3 社会的欲求における絶対的不自由について

第2段階の安全欲求がある程度において充足されると、ひとには次の第3段階の社会的欲求が生じてくる。別言すれば、第2段階の安全欲求の充足によって生み出される相対的自由は第3段階の社会的欲求という相対的不自由を生み出すのである。この欲求がある程度において充足されると、

ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、この欲求は他者の期待を必要とするものであるから、しばらくしてそれが失われると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に渡って相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

4・1・4 尊敬欲求における絶対的不自由について

第3段階の社会的欲求がある程度において充足されると、ひとには次の第4段階の尊敬欲求が生じてくる。別言すれば、第3段階の社会的欲求の充足によって生み出される相対的自由は第4段階の尊敬欲求という相対的不自由を生み出すのである。この欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、この欲求は他者の賞賛を常に必要とするものであるから、しばらくしてそれが失われると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に渡って相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

4・1・5 自己実現欲求における絶対的不自由について

第4段階の尊敬欲求がある程度において充足されると、ひとには次の第5段階の自己実現欲求が生じてくる。別言すれば、第4段階の尊敬欲求の充足によって生み出される相対的自由は第5段階の自己実現欲求という相対的不自由を生み出すのである。この欲求がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、この欲求は無限であるから、しばらくしてそれが失われると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に渡って相対的不自由の状態と相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

4・2 絶対的自由の可能性について

先の第4章第1節における命題の解明によれば、自我においては絶対的不自由である。それゆえ、いうまでもなく現在において生存するすべての人類の自我においても絶対的不自由である。

では、絶対的自由は如何にして可能であるのか。この命題を解明することが本節の目標である。別言すれば、いかなる視点からみた場合に、現在において生存するすべての人類の絶対的自由は可能であるのか。この難解な命題を解明することが本節の目標である。また、それは本稿の最重要目標でもある。

既に、第2章第2節において述べたように、ひとは、社会の中で自分が置かれている地位によって、相対的自由（相対的不自由の是正）を求める

ときもあれば、相対的自由（相対的不自由の是正）を求めないときもある。ひとは、自分が各種の相対的不自由の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的自由（相対的不自由の是正）を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不自由の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的自由（相対的不自由の是正）を求めないであろう。

したがって、こうした視点からみるならば、ひとは常に、一方においては、徹底的に相対的自由（相対的不自由の是正）を求め続けているといえる。

しかし、ひとは誰もがソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、ショーペンハウアー、ニュートン、アインシュタイン等の学術的天才やレオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、ゴッホ、ピカソ等の芸術的天才やバッハ、モーツァルト、カラヤン等の音楽的天才等の天才に、いくら成りたいという強い欲求があっても、容易に成れるわけではない。各種の人間の才能の頂点に立てるのは、極めて少数のひとびとにすぎない。現在において生存する全人類からその各種の天才の人数を引いた人数すなわちほぼ全人類が、自分の才能より遥かに上位に、夜空を照らす導きの星のように煌く天才と同様の相対的自由（相対的不自由の是正）を求めながらも、無理に決まっているとあきらめて、不平不満の永い生涯を生きていかなければならない。

また、女性は誰もがクレオパトラ・楊貴妃・小野小町のような美貌・容姿端麗に恵まれているわけではない。各種の美貌・容姿端麗の頂点に立てるのは、極めて少数のひとびとにすぎない。現在において生存する全人類の女性からその各種の天才的美貌・容姿端麗の頂点に立つ人数を引いた人数すなわちほぼ全人類の女性が、自分の美貌・容姿端麗の才能より遥かに上位に、大空の太陽や夜空を照らす月のように煌く美貌・容姿端麗と同様の相対的自由（相対的不自由からの開放）の頂点を求めながらも、絶対に

無理であるとあきらめて永い一生を生きぬいていかなければならない。

さらに、ひとは誰もが巨万の富者に成れるわけではない。巨万の富者となって金持の頂点に立てるのは、極めて少数のひとびとにすぎない。現在において生存する全人類からその巨万の富者の人数を引いた人数すなわちほぼ全人類が、自分の所有財産より遙かに上位に、一国の王のように君臨する人と同様の相対的自由（相対的不自由からの開放）の頂点を求めながらも、無理であるとあきらめて永い生涯を清く、しかし貧しく、生きていかなければならない。

このように、ひとは常に相対的自由（相対的不自由からの開放）の頂点を求めているが、しかし、すべての人類が相対的自由の頂点に到達することは不可能である。まず、天才と美貌・容姿端麗は誰もが努力して到達できるものではない。また、その頂点に到達できた人でも、その頂点に永遠に留まることはできない。次に、巨万の富者にも努力してなれるものではない。また、その頂点に到達できた人でも、その頂点に永遠に留まることはできない。

それゆえ、何らかの相対的自由の頂点に到達した者も、その頂点にしていることができるのは、一時的短期間もしくは瞬間的短時間であって、永遠にそこにいることができるわけではない。したがって、その人は永遠の絶対的自由に到達したわけではない。

それでは、絶対的自由にはいかにして到達可能であるのか。

ところで、先の天才や美貌・容姿端麗や巨万の富者という特徴は個人の本姓であろうか。仏教によれば、それらは個人の本姓ではなく、虚妄・幻の類であるという。個人の本姓でないもの（虚妄・幻の類）における相対的不自由は、そこからの解放を求めて一生懸命に努力する価値があるだろうか。それは、無価値であろう。

それでは、個人の本姓とは何であるのか。仏教によれば、人間の本性は不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質であ

る単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在である。^{2) 3) 4)} また、人間の本来の姿は、前述の、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在の集合体である。

さて、人間の本性が、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であるならば、無的主体・存在は万物において絶対的平等であるから、人間の本性は、絶対的自由であると言えることができる。なぜならば、人間社会における相対的不平等状態からは相対的不自由が生みだされる可能性が常にあるからである。たとえば、人間社会における相対的不平等状態には上・下あるいは支配・被支配の社会関係を生みだす可能性があり、そこには上（支配）の側に相対的自由の社会関係を生みだし、反対に下（被支配）の側に相対的不自由の社会関係を生みだす可能性があるからである。したがって、人間は絶対的平等でなければ、絶対的自由ではあり得ないのである。

そこで、本節第1項においては、「人間的視点からみた絶対的自由について」を研究する。第2項では、「生物的視点からみた絶対的自由について」を研究する。そして、第3項では、「物質的視点からみた絶対的自由について」を研究する。

4・2・1 人間的視点からみた絶対的自由について

社会化における人間的視点からみた個人の絶対的自由はいかにして可能であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

社会化における人間的視点からみた個人の絶対的自由は、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であるとい

うことを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であることを知れば、すべての人間は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在である点において絶対的に平等であり、また、それゆえに、すべての人間は、無的主体において絶対的に自由であるということを知るからである。

4・2・2 生物的視点からみた絶対的自由について

社会化における生物的視点からみた個人の絶対的自由はいかにして可能であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

社会化における生物的視点からみた個人の絶対的自由は、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての生物の本来の姿と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての生物の本来の姿と同様であるということを知れば、すべての生物は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在である点において絶対的に平等であり、また、それゆえに、すべての生物は、無的主体において絶対的に自由であるということを知るからである。

4・2・3 物質的視点からみた絶対的自由について

社会化における物質的視点からみた個人の絶対的自由はいかにして可能であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

社会化における物質的視点からみた個人の絶対的自由は、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての物質の本来の姿と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての物質の本来の姿と同様であるということを知れば、すべての物質は、不生の単種単一の素粒子を形成する「真空のエネルギー」の構成物質である単種単一の「ニュートリノ」のような無的主体・存在である点において絶対的に平等であり、また、それゆえに、すべての物質は、無的主体において絶対的に自由であるということを知るからである。

4・3 絶対的自由の心境がもたらすもの

絶対的自由の心境がもたらすものは何か。この命題を解明することが本節の目標である。

既に、第2章第3節の「相対的不自由がもたらすもの」で述べた歴史的・社会的問題との関係で述べるならば、それに対応する歴史的・社会的問題の解消を挙げることができる。

① 美女の醜女差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、美女と醜女がある。美女も無数にランク付けられる。醜女もまた無数にランク付けられる。そして、美女度の上位に位

置する人は、美女度の下位に位置する人に対して差別・蔑視する。それゆえ、醜女意識のある人は、美女度を上げるために一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であり、それゆえに絶対的自由であるという心境は美女の醜女差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

② 記憶力の良い人（利口者）の悪い人（馬鹿者）に対する差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、記憶力の良い人と悪い人がいる。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、記憶力の良い人は、記憶力の悪い人に対して差別・蔑視する。それゆえ、記憶力の悪い人は、知識をより多く記憶するために一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であり、それゆえに絶対的自由であるという心境は記憶力の良い人（利口者）の悪い人（馬鹿者）に対する差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

③ 富裕な家庭に生まれた人（金持）の貧困な家庭に生まれた人（貧困者）に対する差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、富裕な家庭に生まれた人がいる。貧困な家庭に生まれた人もいる。富裕な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。貧困な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、富裕な家庭に生まれた人は、貧困な家庭に生まれた人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは富裕な家庭に生まれた人のように、お金持ちになるように一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であり、それゆえに絶対的自由であるという心境は富裕な家庭に生まれた人（金持）の貧困な家庭に生まれた人（貧困者）に対する差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

上記の、相対的不自由がもたらす結果の他にも非常に多くの問題がある。しかし、人間は無駄的主体において絶対的平等であり、それゆえに絶対的自由であるという心境はそれらの問題を根本的に解消する。

④ 永久平和への道

人間的相対的不自由からの開放を求める力と人間的相対的不自由の維持・発展を求める力の衝突を原動力として、隣人間の紛争、集団間の闘争、国政の内乱そして国際的戦争は現象する。しかし、人間は無駄的主体において絶対的平等であり、それゆえに絶対的自由であるという心境はそれらの問題を根本的に解消する。永久平和への道は、この道の他にあるだろうか。

5 結論

本稿の目標は、社会化における絶対的自由への道を解明することであった。この目標に向かって、まず第2章においては、「社会的存在における相対的不自由と相対的自由について」を研究した。その第2章第1節においては、「相対的不自由の現実について」を研究した。ここでは、現実社会における相対的不自由の実態について明確にした。¹⁾

次に、第2章第2節においては、「相対的不自由の是正について」を研究した。ここでは、ひとは、自分が各種の相対的不自由の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正（相対的自由）を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不自由の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正（相対的自由）を求めないであろう。以上のことを明確にした。

その次に、第2章第3節においては、「相対的不自由がもたらすもの」について研究した。ここでは、相対的不自由がもたらす歴史的・社会的問題について明確にした。

次に、第3章においては、「個人的存在における相対的不自由と相対的自由

について」を研究した。その第3章第1節においては「人間的欲求と相対的不自由について」を研究した。ここでは、人間的欲求と相対的不自由の関係について明確にした。

次に、第3章第2節においては、「人間的欲求充足と相対的自由について」を研究した。ここでは、人間的欲求充足と相対的自由の関係について明確にした。

その次に、第4章においては、「絶対的自由への道」について研究した。その第4章第1節においては、「自我における絶対的不自由について」を研究した。ここでは、自我はその根底から絶対的不自由であることを明確にした。

次に、第4章第2節においては、「絶対的自由の可能性について」を研究した。ここでは、人間の無的主体・存在においてのみ絶対的自由が可能であることを明確にした。

最後に、第4章第3節においては、「絶対的自由の心境がもたらすもの」について研究した。ここでは、先の第3章第1節の「相対的不自由がもたらすもの」として生じてきた歴史的・社会的問題が、絶対的自由の心境を修得することによって、すべて解消されることを明確にした。

[注]

- 1) 「自由」と「不自由」について、J. J. ルソーは『社会契約論』の「第1章 第1編の主題」の冒頭において「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。ある者は他人の主人であると信じているが、事実は彼ら以上に奴隷である。」と述べている。(ルソー著、井上訳、平岡責任編集、1966：232)

「相対的不自由」についての分析研究を進めるならば、極めて複雑な内容となるであろう。しかし、本稿の最終目標はそこにあるのではなく、人間における絶対的自由の可能性について知ることにある。確

かに、その人間における絶対的自由の可能性について知りたいという欲求の原動力となっているのは、いうまでもなく人間社会における相対的不自由の現実である。しかしながら、人間における絶対的自由の可能性について知りたいという欲求の原動力である人間社会における相対的不自由の現実とその歴史的事実の分析・解明のために多くの時間を費したくはないのである。それで、現実社会における「人間的相対的不自由」の分析・解明については、粗雑のままでお許し願ひ、また、「人間的相対的不自由」の起源および歴史については、上記のルソーの名著を研究していただくことにして、筆者は「社会化における絶対的自由への道」を探究する道を進んで行きたいと思う。

- 2) 「素粒子」「真空のエネルギー」および「ニュートリノ」等についての詳細は、佐藤 1979 : 179—215、編集部・赤谷、協力：駒宮他 7名 2005 : 28—55、リービット著、齊田訳 1976 : 5—19およびアイザック・アシモフ著、齊田訳 1977 : 262—264を参照してほしい。

しかし、ここで「素粒子の種類と大きさと生成・消滅する時間の長さ」について、上記の文献の内容を引用しながら、簡単に触れておきたいと思う。

[1] 素粒子の種類

1. 素粒子の種類 (1)

(1) 「電子、陽子、中性子はすべて素粒子と呼ばれる」(佐藤1979 : 198)

(2) 上記 (1) より、素粒子には電子、陽子、中性子が含まれる。

2. 素粒子の種類 (2)

(1) 「われわれは原子の世界から原子核の世界に進めば、電子、陽子、中性子、光子のほかに π 中間子、ミューオ

ン、ニュートリノなど数多くの素粒子を新しく素粒子の
仲間に加えねばならない。」(佐藤1979: 201)

- (2) 上記(1)より、素粒子には電子、陽子、中性子、光子のほかにπ中間子、ミューオン、ニュートリノなど数多くの素粒子が含まれる。

〔2〕 素粒子の大きさ

1. 分子の大きさ

- (1) 「空気とは、窒素や酸素などの分子が飛びまわっている状態である。大気圧(1気圧)なら1立方センチメートルあたり10の19乗個程度の分子がある。つまりサイコロほどの大きさの空間の中を、1兆個の1000万倍という途方もない数の分子が飛びまわっているわけだ。」(編集部・赤谷, 協力: 駒宮他7名2005: 30)

- (2) 上記(1)より、1分子の大きさは「1分子の大きさ=1立法cm÷10の19乗」である。

2. 分子と原子の大きさの違い

- (1) 分子(molecule)とは「① 幾つかの原子の結合体で物質がその化学的性質を保って存在しうる最小の構成単位とみなされるもの。高分子のように数千から数万の原子からなるものもある。」(前掲『広辞苑(第二版補訂版)』)

- (2) 上記(1)より、1原子の大きさは「1原子の大きさ=1分子÷数千から数万」である。

3. 原子の大きさ

- (1) 原子(atom)とは「② 物質を構成する一単位。各元素のそれぞれの特性を失わない範囲で到達し得る最小

の微粒子。大きさは、ほぼ一億分の一センチメートル程度。原子核を中心に、一乃至九〇余個の電子が存在する。」
(前掲『広辞苑(第二版補訂版)』)

- (2) 上記(1)より、原子の大きさは「ほぼ一億分の一センチメートル程度」である。

4. 原子核の大きさ

- (1) 原子核とは「原子の中核をなす粒子。原子に比べるとはるかに小さいが、原子の質量の大部分が集中しており、陽電気を帯びる。陽子と中性子より成り、陽子の数が原子番号、両者の総数が質量数に等しい。」(前掲『広辞苑(第二版補訂版)』)

- (2) 上記(1)より、原子核の大きさは「原子に比べるとはるかに小さい」である。

5. 電子の大きさ

- (1) 電子 (electron) とは「素粒子の一。原子・分子の構成要素の一。十九世紀末、真空放電中に初めてその実在が確かめられた。質量は 9.1×10^{-28} グラム、電荷は負で、その絶対値を電気素量という。」(前掲『広辞苑(第二版補訂版)』)

- (2) 上記(1)より、電子の大きさは「質量は 9.1×10^{-28} グラム」である。

6. 陽子の大きさ

- (1) 陽子 (proton) とは「水素の原子核。電子の1836倍の質量と、電気素量に相当する陽電荷をもつ。素粒子の一つで、中性子と共に原子核の構成要素。」(前掲『広辞苑(第二版補訂版)』)

- (2) 上記(1)より、陽子の大きさは「電子の1836倍の

質量」であり、電子の大きさは「質量は 9.1×10^{-28} グラム」であるから、「質量は 9.1×10^{-28} グラム $\times 1836$ 」である。

7. 中性子の大きさ

- (1) 中性子 (neutron) とは「素粒子の一。陽子とほぼ同じ質量を有し、電荷をもたず、物質中の透過性が強い。陽子とともに原子核を構成する。1932年、チャドウィック (Chadwick) がアルファ (α) 粒子をベリリウムにぶつけたとき発見、その後種々の原子核反応において放出されることが知られた。」(前掲『広辞苑 (第二版補訂版)』)
- (2) 上記 (1) より、中性子の大きさは「質量は 9.1×10^{-28} グラム $\times 1836$ 」である。

8. ニュートリノ (中性微子) の大きさ

- (1) ニュートリノ (中性微子) とは「ベータ (β) 崩壊の際にエネルギー恒存則に基いて存在を仮定された中性の素粒子。現在では β 崩壊の逆反応によって、その存在は実証されたと考えられているが、ミュー (μ) 中間子が壊れる場合と核子が壊れる場合とで生じる中性微子は異なるという説がある。」(前掲『広辞苑 (第二版補訂版)』)
- (2) 上記 (1) より、ニュートリノ (中性微子) の大きさは、大体で言えば、電子の大きさと同じくらいで、「質量は 9.1×10^{-28} グラム」である。

9. 素粒子の大きさ

上記より、素粒子には電子、陽子、中性子、光子のほかに π 中間子、ミューオン、ニュートリノなど数多くの素粒子が含まれるが、それらの大きさは、大体で言えば、電子の大きさと同じくらいで、「質量は 9.1×10^{-28} グラム」である。

[3] 素粒子の生成・消滅する時間の長さ

- (1) 「場」は空間のあらゆる場所で、常に振動している。「場」が大きく振動した瞬間は、まさにエネルギーを外部からあたえられたのと似たような状況である。この瞬間、真空から粒子と反粒子がペアになって生まれる（対生成）。

ただしこのようなペアの存在が許されるのは、ほんのわずかな時間でしかない。電子と陽電子の場合なら10の2乗分の1秒ほど、つまり1秒の1兆分の1のさらに10億分の1ほどの時間だ。」（編集部・赤谷, 協力：駒宮他7名2005:50)

- (2) 上記(1)より、1素粒子が生成・消滅する時間の長さは「1素粒子が生成・消滅する時間の大きさ=1秒÷10の2乗」である。

3) 「分割不能の物質」について少し説明しておきたい。素粒子とは、分割不能の物質であるという。しかし、分割不能の物質というのは、一般に物質は無限に二分割が可能であるという原則に従うならば、存在することができない。この原則と矛盾するからである。分割可能でしかも分割不可能な物質というものは人間の論理能力の限界を超えているものであるから、それを理解することはできないし、それを想定することもできない。また、分割不能の物質というのは、空間と時間を持たない物質であるという原則に従うならば、それを人間の能力で想定することは不可能である。確かに、空間と時間を持たない物質が存在するのであるならば、その物質は分割不能である。しかし、それは人間の論理能力にとっては、「無」であるから、物質では有り得ない。したがって、分割不能の物質というものは、可想体にすぎないといえよう。

4) 「無的主体（存在）」について少し説明しておきたい。この「無的存在」と同様のことをあらゆる仏教用語として、「空」「縁起」「無自性」「無常」

「仏性」などがある。

① 「宇宙（万物）は空である」における「空」については、非常に多くの学説がある。中村 1994bには、次のように述べられている。

「〈空〉は大乗仏教の根本観念であるということは、だれでも知っている。では〈空〉とは何か、ということになると、なかなか答えが簡単には出て来ない。

〈空〉を説いた文献に関する研究は、毎年無数に多く刊行されている。しかし「〈空〉とは何か？」という端的な問題にたいしては、かならずしも答えが与えられていない。学者はとかく避けて通っているという傾きがある。

ここでは、空の理論を説いた代表的な哲学者であるナーガールジュナ（竜樹）の主著『中論』を主な手がかりとして、空の論理を解明しようと努めることにする。（中村 1994b：はしがき i）

したがって、「空」の理論に関心のある人は、この『空の論理』およびその他の文献を参照してほしい。

② 「縁起」あるいは「十二縁起説」についての詳細は、中村 1994a：440—528を参照してほしい。また、Olson, Carl, 2005：38—45も参照してほしい。

③ 釈迦の「空」については、『般若心経』を参照してほしい。『般若心経』の解釈本はたくさんあるので、ここでは山田訳 1986および高神 1952を挙げておきたい。

④ 六祖慧能の「本来無一物」も「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、久須本 2000：155—157を参照してほしい。

⑤ 臨済の「無位の真人」もまた「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、臨済著、入矢訳 1989：20—21を参照してほしい。

⑥ 盤珪の「不生」も「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これ

については、玉城 1994 : 68—71を参照してほしい。

- 5) 「社会化の原動力—体系の大要—」についての詳細は、高澤 1997を参照してほしい。
- 6) 「社会化の発展」についての詳細は、高澤 1998を参照してほしい。
- 7) 「社会化の最終目標」についての詳細は、高澤 2006を参照してほしい。
- 8) 「社会化の最終目標への道」についての詳細は、高澤 2009を参照してほしい。
- 9) 「社会化における絶対的平等への道」についての詳細は、高澤 2010を参照してほしい。
- 10) マズローの主張した第1段階の生理的欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 56—57を参照してほしい。
- 11) マズローの主張した第2段階の安全欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 61, 65—67を参照してほしい。
- 12) マズローの主張した第3段階の社会的欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 68を参照してほしい。
- 13) マズローの主張した第4段階の尊敬欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 70—71を参照してほしい。
- 14) マズローの主張した第5段階の自己実現欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 72を参照してほしい。

[文献]

Jean-Jacques Rousseau, 1762, *Du Contract social, ou principes du droit politique*. (=1966, 井上幸治訳『社会契約論』, 平岡昇責任編集『世界の名著30 ルソー』中央公論社。所収。)

高澤勇, 1997, 「社会化の原動力—体系の大要—」『長野経済論集第34号』
長野経済短期大学学会

高澤勇, 1998, 「社会化の発展」『長野経済論集第35号』長野経済短期大

学学会

高澤勇, 2006, 「社会化の最終目標」『長野経済短期大学論叢第43号』長野経済短期大学学術研究会

高澤勇, 2009, 「社会化の最終目標への道」『信州豊南短期大学紀要第26号』信州豊南短期大学

高澤勇, 2010, 「社会化における絶対的平等への道」『信州豊南短期大学紀要第27号』信州豊南短期大学

Maslow, Abraham Harold, 1970, *Motivation and personality, second edition*, Harper & Row. (=1987 小口忠彦訳『人間性の心理学』産能大学出版部。)

佐藤文隆, 1979, 『宇宙の創成』紀伊國屋書店

編集部・赤谷拓和 協力：駒宮幸男・岡野達雄・坂井建雄・湯本雅恵・家正則・末次祐介・佐藤文隆・佐々木真人, 2005, 「真空は無？その正体は？」『ニュートン (Newton)』(2005年8月号) ニュートンプレス

中村 元, 1994a, 『中村元選集〔決定版〕第16巻 原始仏教の思想Ⅱ (原始仏教Ⅵ)』春秋社

中村 元, 1994b, 『中村元選集〔決定版〕第22巻 空の論理 (大乘仏教Ⅲ)』春秋社

Olson, Carl, 2005, "Original Buddhist sources" Rutgers University Press

高神覚昇, 1952, 『般若心経講義』角川書店

山田無文訳, 1986, 『般若心経』禅文化研究所

柳澤桂子, 2004, 『生きて死ぬ智慧』小学館

久須本文雄著, 2000, 『新装版・禅語入門』大法輪閣「五五・本来無一物」P. 155~P. 157

臨濟著, 入矢義高訳, 1989, 『臨濟録』岩波書店(岩波文庫)「上堂」P. 20~P. 21

玉城康四郎著, 1994, 『盤珪 (法語・説法)』講談社「盤珪禪師法語 (上・網干の巻)」P. 68~P. 71

The Way to the Absolute Freedom
in our Socialization

TAKASAWA, Isamu

The aim of this paper is to know the way to the absolute freedom in our socialization . The conclusion of this study is the following. The essence of human is an elementary particle or the only one energy of vacuum or a neutrino. It is not a creature. It is a sort and a single one. By know this ,we can know the absolute freedom in our socialization. Because, if the essence of human is an elementary particle or the only one energy of vacuum or a neutrino and it is not a creature and it is a sort and a single one, it is the same thing of all the essence of all living things in the universe, and it is the same thing of all the essence of all matters in the universe. Therefore , if we know this ,we know that the human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe. The absolute equality of the human and all living things and all matters in the universe creates the absolute freedom of the human and all living things and all matters in the universe. Because, everything can not bind everything within the absolute equality of the human and all living things and all matters in the universe. Therefore, If we know that the human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe, we know that the human and all living things and all matters are the absolute freedom in the universe.

Keywords: absolute freedom, socialization, an elementary particle, one energy of vacuum, a neutrino